

# 京極読書新聞 <第74号>

発行日 平成27年12月1日(火)  
京極町生涯学習センター湧学館

## 京極家、京極氏、京極さん…

### <『平家物語』を読む会> 村山功一



私たちの会では毎年一回、京都在住の黒滝千織さんによる、主に京都を中心とした『平家』にまつわる談話会（通称「黒滝レポート」）を行っています。今年は、京都を離れ富山、鳥取、淡路島などを巡っての報告でしたが、それとは別に初めての試みとして、ちょっとしたアンケートをとり話題の一つとしてみました。

京都に住む人たちが私たちの住む京極町について、どんなイメージを持っているのかを答えてもらうものです。

このようなアンケートを考えた発端は、以前、黒滝さんにある大学の先生が「京極町って、京都のお公家さんとゆかりがあるの？」と聞いたことによります。<そうか、京都の人にとって“京極”といえは、やはりお公家さんのイメージか>と思い、その実態を調べてみようと思い立ったことが一つ。もう一つは、京極一族と『平家』の遙か遠い接点を、現代に生きる京都の人々が連想できるかという（やや意地悪な）興味からでした。

もっとも、このアンケートの設問にも問題点が多く、さまざまな指摘もありましたが、それはともかく、かなり面白い結果となり大きな成果があったと思っています。詳しい結果の分析は後日黒滝さんから届くので、改めて紹介します。ここでは、回答者から指摘された事柄について触れておくことにします（次ページよりアンケート参照）。

◀ 10月1日(木)開催  
平家物語読書会 “黒滝レポート”

京極読書新聞第75号は  
1月15日発行予定です。



まず、「家」と「氏」について。これは諸説あり、また時代によって異なる場合がありますが、公家の家系を「家」武家の家系を「氏」とする説を採り、「京極家」「京極氏」の名称は湧学館蔵『日本史諸家系図人名辞典』（小和田哲男・監修／講談社）に依りました。また、角田文衛氏によると、桓武平氏の中で「平家」と呼ぶのは、清盛の一族だけとしています（『平家後抄』講談社学術文庫）。太政大臣従一位に上り天皇の外戚となり、その子弟も多数公卿、殿上人という高位にあったことから、武家ながら公家として「家」を名のったのでしょう。これらを踏まえて設問Q2、Q3を作りました。しかし、諸説についての配慮を欠いたことで、指摘される結果になったものと思われます。

Q3の5人について。2. 京極為教（ためのり）、5. 京極殿以外はみな『平家』に関連のある人物です。この5人の中から京極町と関係ある人物を選んでもらうのがQ4。ところが、ここでも大きなミスが…。Q4の正解は3. 京極氏信（うじのぶ）です。近江源氏佐々木氏の一族で、氏信の先祖佐々木盛綱、高綱兄弟が『平家』に登場します。その末裔が京極高德（たかのり）です。ところが、ところが、うっかりでした。『平家』とは何の関わりのない5. 京極殿は、れっきとした戦国大名京極氏のお姫様でした。しかも、氏信よりは時代的にもずっと高德に近い人物ということになります。したがって、正解が二つというお粗末なアンケートになってしまいました（ああ、恥ずかしい）。このため、回答者を混乱させ

## アンケート

- Q1 北海道に『京極町』という町があることを知っていますか？  
1. 知っている 2. 知らない
- Q2 京都人にとって『京極』という人名は、どちらのイメージですか？  
1. 公家 2. 武家
- Q3 京極を名乗る下記の人物で、知っている人に○をつけてください。  
複数回答可。
1. 京極太閤（土御門京極家関白藤原師実。京極大殿ともいう）
  2. 京極為教（歌人藤原定家の孫。一条京極に邸宅があった。この家系を『京極家』という。また、弟の為相の家系が「冷泉家」）
  3. 京極氏信（近江源氏佐々木流。高辻京極に邸宅があった。この家系を「京極氏」という。）
  4. 京極の局（藤原俊成の娘。定家の姉または妹。後白河院に女房として仕える。その後、藤原成親の妻。娘は平維盛の妻）
  5. 京極殿（豊臣秀吉の側室・松丸殿とも）
- Q4 北海道後志管内虻田郡京極町と関係のある人物または家系は、上記1～5のどれだと思いますか？
- Q5 該当する項目に○印を付けてください。  
a 男 b 女  
c 年齢層  
(・10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代以上)

以上、ご協力ありがとうございました。



▲日本史諸家系図  
人名辞典  
講談社  
R/288.2/二ホ



▲平家後抄 (上・下)  
角田文衛著 講談社  
\*湧学館所蔵なし

てしまったようです。このような杜撰（ずさん）なアンケートにも関わらず、真剣に取り組んでいただいた回答者の方々に感謝しております。

それにしても、“京極”を名のる人物群の系譜の広がりを改めて感じる機会になりました。これも今回の大きな成果と思っています。

で、黒滝レポート終了後ある会員の方から「函館に京極通りという通りがあるけれど、やはり京極一族と関係あるのでしょうか？」と聞かれ、分かりませんでした。地図を見ると確かにありますので、そのうち調べてみよう。すると今度は「後志文学散歩」の折、新谷さん（湧学館副館長）が

解説してくれた小説に、小樽に住む大工の棟梁で“京極さん”という人物が登場。作中、京極農場を開いた最初のメンバーの一人と描かれています。小説ですが、ありそうなことです。＜うーん、小樽にも京極さんか＞。きちんと調べると道内にももっともって沢山の“京極さん”という人物や“京極〇〇”という地名がありそうな気がしてきました。その広がりとお奥深さ……京極、おそるべし！と実感した次第でした。

なお、以前、高橋教育長より丸亀藩の系図とともに、多くのご教示をいただきました。記してお礼申し上げます。



## 「京極文芸」創刊号～第15号 復刻作業、始まる!

昭和48年（1973年）12月から昭和57年の11月まで、ほぼ十年の長きにわたって発行された『京極文芸』。その、創刊号から第15号までの歩みを完全復刻しようという試みが、今、「後志の文学」読書会のもとで進められています。湧学館では全15冊を所蔵していますが、劣化や汚損を防ぐために館内閲覧のみの資料として取り扱ってきました。昔の印刷物なので「活字が小さい」「製本が未熟」などの意見も寄せられています。「もっと貸出利用にも耐えうる形で復刻を！」という声を受けまして、湧学館では、読書会のテキストづくりで培った製本技術を活かし、『京極文芸』拡大復刻版を構想中です。（新谷保人）

文化不毛の地に灯をともし——大げさに言えば、そんな気持から文芸クラブ結成の話が出たのだと思う。すでに一年も前の話である。そして曲がりなりにも準備会が設けられ、結成にこぎつけたのは二月の事であった。それから更に半年を経過して、やっと『京極文芸』第一号の編集を完了することができたのである。まさに難産であった。

（創刊号／編集後記）

『京極文芸』の編集責任者・針山和美氏は同人誌誕生の経緯をこのように語っています。才能ある同人を集め、教育委員会内に「京極文芸クラブ」を置くよう行政と交渉し、町内の企業や商店に広告料収入を呼びかける…ただ単に優れた原稿を書いているだけではすまされないさまざまな苦労がここから始まります。

然し、本当の困難はこれからであろうと思う。人口わずか四千人ほどの小さな町で、文芸雑誌を発行し続けると言うこと自体、まれなことでもあり、また無理なことだと思えるからである。だが、いったん漕ぎ出したのだから、三号雑誌の汚名に沈まぬように頑張りたいものである。そのためにも会員の輪をもっともっと広げ、真に京極町文化の推進の一翼を担いたいと念じている。

（同「編集後記」）

インターネットの普及など、現代のメディア進化は私たちの情報発信（受信）をきわめて容易なものにしてくれました。けれど、楽になったその分、私たちの表現や言葉はひどく安くなったようにも感じています。今、この時代での『京極文芸』の復刻には、なにか、私たちが知らずに忘れてしまった力を今一度思い出させてくれる魔法の鏡のような効果があるのかもしれない。



『京極文芸』に関する資料を探しています。現在、湧学館で所蔵している資料は、創刊号～第15号の15冊。同会内部で発行されていた「京極文芸クラブ会報」No. 1～No. 26。同会の会計簿などがあります。これ以外にも、なにか関連の資料（写真、録音テープなど）がありましたら湧学館へご一報ください。

**発行**

京極町生涯学習センター湧学館  
 〒044-0101 京極町字京極158番地1  
 TEL 0136-42-2700(代表)  
 FAX 0136-42-2032  
 E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください  
<http://lib-kyogoku.jp>

